

「松蔭の日記」は京都生れの一才女の手になつたもの、その中におなじをりの災害をしるしあれど、もとより白石の筆の實を寫せるとは比すべくもない。なほ「をりたく柴の記」は寶永四年（西曆一七〇七年）の富士の山焼をも誌してある。今見る富士の寶永山は、そのをりに生じたものである。

安永八年（西曆一七七九年）、櫻島が爆發した。豊後の儒者、三浦梅園は、天地に條里ありとなすもの、其の見より「櫻島火變の説」をしるした。

ことし安永己亥九月廿九日の夜より翌十月朔日、南にあたつて雷の如くにして雷にあらず、天鳴ともいふべくして然にあらず、石火矢などつるべ放つ様に聞ゆ。肥州阿蘇山焼くるかなどいへり。程へてきくに、薩摩鹿兒島より南にあたり櫻島とて、めぐり十里もある様なる島あり、晝夜八九十度も地震り、南北の端より火起り、大石を飛すこと六七里の外に及び、風起り黒烟東南に吹覆ひ、人死傷其數いまだしられずといへり。門生其故を

問ふにこたへけるやう、去年以來、伊豆の大島などやくるよし沙汰せり。これは櫻島より火勢ゆるく久しき様にきけり。是誠に稀代の變なり。されども天地より見れば常理なり。一體地といふものは、水燥の二つの氣にて細縲造化の用をなすものなり。地の中は菌瓣蜂窠の如しと、古人もいひて、菌のうちの理すぢの如く、蜂の窠のあなの如く、蠶ばみたる木の如く、始終あちこちと穴あるものなり。燥とは地の氣なり。故に體はなし。水の對偶のものなり。我輩かくの如く、ねつ起きつ、呼吸を通ずる處も、其氣のうちなり。地中すべて此氣と水とふたつあり。水は高きに結び、卑き處に化する故、地上にうかみ、燥は地下に生じ、天中に化するものゆゑ、よく地中に伏す。水は川谷を道路として、處によりては伏流するもあり。燥は地中の穴を往來して、鬱してあつまれば火となる。其氣穴、山岳の間に通ずれば、風となるものを風穴とし、火出るものを火穴とし、又時あつて雲

霧を起す處ともなる事、皆燥氣の變なり。燥氣の火となるは、水の氷となると同じ理にて、冬の雨露をむすびて霜雪となるも、夏の温熱を鬱して雷電となるも一つ事なり。肥後の阿蘇、信濃の淺間などいふも其氣の外にぬくるなり(以下なほ長ければ略す)

などいつてある。地震を「水神が動く」からといひ、「金翅鳥が動く」ゆゑと説いた平安期や、鎌倉時代にくらべると、徳川期のある人のおもひの進んだ事が分る。言ひ方によつては、この梅園のおもひを、日本の地震學の芽ぐみそめたものとしてもよいかも知れぬ。

天明三年(西曆一七八三年)、淺間山が噴火した。大阪の歌人、加藤景範に「淺間岳炎上記」の一文がある。見るに足るべきものである。これ實に信州、上州のみか、關東の人の心を寒からしめた異變であつた。寛政四年(西曆一七九二年)の肥前雲仙嶽の山焼は、北窓瑣談などにしるされ、天保元年(西曆一八三〇年)

の京都の地震について、弘化四年(西曆一八四四年)の善光寺地震には、悟乗といふ僧の長歌あれど、私は寫さうと思はない。善光寺地震の記録には詳細なのが、いろ／＼傳つてをる。安政元年(西曆一八五四年)と同二年(西曆一八五五年)との大震は、「安政見聞録」その他數々の書を殘した。それより後のは、明治廿四年(西曆一八九一年)の濃尾震災、明治廿七年(西曆一八九四年)の東京のなど、人の記憶にうせやらぬに、此の度の變を生じたのである。

四

西の國の文化が此の國にいたると共に、地震は新に研究せられるやうになつた。はじめは、ミルン氏、グレイ氏などの外國人教授によつて開かれた地震學は、關谷清景博士いづるに及んで、日本人のものとなつた。博士は不幸にして早く世を去られたけれど、後繼者に大森房吉博士以下がある。大森氏にも、今村氏にも地震學の著がある。今村氏の方が分り易いかも知れぬ。

さらに震災豫防調査會は、濃尾の地震の後、菊池大麓男が貴族院に提出したる建議の結果として現れた。今日にいたるまで百冊近きその報告書は、一般の讀者には乾燥ならんも、貴重な資料である。その中、地質に關するものは、小藤文次郎博士の指導のもとに行ははれて、後學を益してをる。

かくして幸か、不幸か、研究材料の豊かなるまゝ、日本の地震學は、世界において一頭地を抽いてをる。されど今より二十年の後には、あの頃は、あれほどに地震學も幼稚なりしといふに至らん事を私は望む。

みやこ

千年の帝都たる京都を京たらしむるには、ひとたび長岡に都をいとなむといふ豫習が入用であつた。その長岡に都を建てた藤原種繼は、反對黨に殺された。情性はおそろしい。

桓武天皇の京都は、左京即ち東の京、右京即ち西の京の二つに分れてゐた。右京のややに荒廢した事は、平安の文學に見えてをる。或は右京は計畫にとゞまつて、初めよりさまで整ひたるにあらざるべしとの説もある。何かは知らず人々は次第に鴨河の方へと、都を動かしていつた。

王者の規模を時代と人民とが、動かしたのである。

廣い路をつくるといふ話をきくと、朱雀大路の、大内裏の正面に、まつすぐ

に向つてゐた事がおもはれる。公園を設けるときくと、神泉苑の事がおもはれてくる。あの條里の整へる都をかへりみれば、日本人の進歩の、實は甚だ遅々たる事がおもはれる。

桓武遷都の後、百六十六年、村上天皇の天徳四年九月二十三日の夜、御所より火が出た。京の地は焦土と化した。藤原在衡、上卿として、内裏新造の事にあたつた。されどありし日の規模に及はざる事遠しと傳へられる。

かの日にまこと伸ぶるを得ざりしか。はたまた氣魄たらざりしか。右京はその頃より次第にすたれたといはれる。いな、それより以後の京は、新勢力の地とは見られなかつた。

「みやこのならひ、何わざにつけても、みなもとは、田舎をこそたのめるに」……

……帝都と地方と、利害相わかるゝやうにおぼえた日もあつたらしい。

今昔物語などの、「今は昔」といふ書き出しに反して、慶長見聞集の、「見しは

今」といふ書き出しは、新興の地と人とおもはせる。しかも慶長六年十月二日の大火の後、御奉行衆仰せには、町中草葺ゆゑ火事絶えず、幸ひなるかな、このついでに皆板葺になすべき由」とは、江戸の初期の、町をこぞりて假舎同然なりしさまがおもはれる。

記者は時代に關する事をとけといふ。時代とは何ぞ。過去を脱しえたる現在はなく、舊時代の影響をのがれえる新時代はない。似たる世相のもとに、世はうつりゆく。

たゞ、民の氣魄つよくば、倒れて倒れず、焼けて焼けまい。火事は江戸の花よといへる言は、淺きが如くして強き新都の人の意氣であつた。それを實ならしむると否とは、古人の子なる我らの心いかにある。

をどめらが續麻かくとふ鹿脊の山、時しゆければ都となりぬ。——萬葉、六一

倭姫命とマドンナと

假にイエスの誕生を、ヘロデ王の死にたる西暦紀元前四年とし、日本の皇紀をあるがまゝにうくるとすれば、イエスの生れたる年は、垂仁天皇の廿六年丁巳にあたる。この年の冬こそ御門の御女倭姫の命が、天照大神の導かせ給ふまに、神の宮居を、伊勢の度會わたらひなる五十鈴川いすづがはのほとりに遷し参らせたる時なりと傳へらる(書紀の一書その他)

「倭姫命世記」は歴史家の疑はしとなす書であるけれど、あれに含まれたる如き想を、我らの祖先の抱き居りし事は、疑はれまい。即ち神、倭姫の命の夢に現れ給ひて、「高天が原にまして吾が見し國に吾をませ奉れ」と諭したまへるまゝ、姫は己を忘れ、大神の心を心として、いづくともなく出で立たせ給ひ、近

江にうつり、美濃に入り、伊賀に進み、さながらイスラエル人が荒野にさまよひしが如く、三十餘年の星霜を経て、やうやくに今の内宮の地に鎮まりましたとある。「高天が原にまして、御門おしひらき見給ひし地」であつても、そこへ進むには、幾多の歳月を要してをる。さらにさうなるには、神の御杖みつゑ代となりて仕へまつる清き婦人を要してをる。神は動き、人は従ふ。「神の國」のすがたはこゝにも見られよう。

マタイとルカとの兩書のはじめにあらはれたる記事について、私は今、受賣の批評を加へようとはせぬ。時代の遅速はともあれ、あれも人の想ひである。イエスを仰いだ目は、おのづと其の母へとむかふ。地中海をめぐる國々の人は、イエスの母に、神の御告をかしこみ、御旨のまゝなれかしと、私の心をはさまぬ女性をみた。そしてこれを、マドンナ(わが姫)といはざるを得なかつた。けがれしらぬ處女よ、とこしへの女性よ、神の母よと、人々の心は高く鳴

つた。人の心に生きてをるマリヤは、一方において清き處女であり、一方において慈愛の母である。のちには「けがれなきみごもり」といふおもひが、そこに生じた。

私は西の國におけるマリヤの位地を、倭姫の命が日本の人の心に有してをつたまで言はぬ。されどおもひに色ざられた女性として、似通へる節の全くなきにもあらぬを覺える。處女マリヤの想の國に現れたるは、神の御使であり、倭姫の命の夢にみえたるは、天照す大御神である。御告畏こむ處女は、人の世の花を我に咲かさうと思はない。花にして他花（そとはな）の花粉を受くれば、次の代へと急ぐ爲に、早く萎れる。花粉を宿さねば、容易に萎れない。それに似たやうなおもひを、古人は抱いて居つたのであらう。倭姫の命は長壽であつたといはれる。かりに崇神天皇の五十八年に齋宮となり、景行天皇の二十年につとめを退かれたしとも、任にある事百三十年となる。されど傳へは、遙か後の雄略天皇

の二十一年の冬、外宮の今の地に遷りたるをも、倭姫の命の夢みたるによるとなす。然らば前後五百十何年にわたれる人物となりて、歳の長き事、日本史に類なきにいたる。もとより徳川期の學者には、伴信友の如く、之を非なりとするもあれど、倭姫の命長壽の信仰は、神皇正統記にもあらはれてをる。

私は倭姫の命の物語を虚しき事のみと斷じたくない。内宮のうつらせ給へるをりの御杖代、倭姫なるより、外宮のをりにも、同じ姫なりしとするのであらうけれど、さう思ふ人の心は蔑しがたい。更にまた人の世の春にあらずとも、どこ代の春は別に存せぬとも限るまい。古傳の英雄、日本武尊は、ひとり、をば君なる倭姫の命に、その惱みを訴へて居る。日本武尊、子の如くかこてば、倭姫の命は母の如く、之をばげまされた。草薙の劍も、日本武尊は、倭姫の命より傳へられた。萬葉集（一）には、

河のへのゆつ磐むらに草むさず、常にもがもな、どこをとめて

といふ歌がある。作者たる吹黄の刀自がどういふ心で詠んだのか、分らぬけれど、我が仕ふる姫君たゞ若くおはせといふのでなく、「どこをとめ」の信仰が、その頃の人に存してゐたのではあるまいか。私はこゝで細かな事を説かうとするのでない。たゞ我らの祖先に、神に仕ふる者は神に導かるゝ者にして、私心あるべきにあらず、従つて此の身に春の花は咲かねど、命極めて長しと思はれたのであらうと説くのである。後の世に鹿島の物忌に選ばれる少女は、女の身にあるべきものあらずして、長命なりといふも、相通せる想であらう。

私は倭姫の傳説の霞の中に、心よく體を支配したる女性を觀る。身を神に任せまつりし女性をみる。そして之を古代にのみ限らうと思はない。

十二月の廿五日にクリスマス祝ふは、一方においてロマのサツルヌスの祭……冬至の陰きはまつて陽を生ずる期節にちなみ、一方においては日の神ミトラの誕生の日とつたへられしによるのか。さりとしてそれだけで説明し盡し

たものでもない。冬の日には春をまち望むやうに、暗きに在る我らは光のあしたをまつ。人と生れて人らしからぬ我らは、まことの人の子をしたふ。そのあこがれが、クリスマスとなつて現れたのでなからうか。しかおもふをりに、人は心に救主を忍がき、またをさなきイエスをかき抱く女性をおもふ。世はいまだ冬なれば、のちの救主も幼くおはす。

我らはこゝにクリスマスを迎ふといふ。されど我らとイエスと眞の縁あらずば、クリスマスは一の年中行事に過ぎまい。イエスと親しむ者のみ、イエスを心の宮居に迎へよう。イエスの徒はバプテスマによりてイエスとともに生れ、聖晚餐によりてイエス其の人と合せんとする。かくて我らはイエスの誕生のみか、己らの第二の誕生をも、クリスマスに觀んとする。

かゝる地にある我らは今己が生涯をいかに畫かんとするか。己が生命より何を生まんとするか。人間本來の要求は、己を如實に畫かんとするのみならず、

いと高き者によつて己を畫かんとする。己が生命を續けんとするのみならず、之を新にせんとする。斯うして救は、次々に生じてくる。我らも救を生む一人となりたい。さるをりに己をかへりみれば、まづ我が信のおこりの低きに心づく。されど起因のみで事は定まらぬ。起りし所低くとも、我らは之を高うしうる。嫉みの神は愛の神となり、幼兒はイエスとなる。我らは我らの心を育てえよう。さらにまた我らの先に、我らの間にたふれたる者少からずとの念も、我らのためにはせる。されど倒れたる者も、なほその心の高潮に達したりし日を忘れまい。ある點に達しえたりしならば、それよりさきに達せられないと、誰が言へようぞ。後の代は先の代をかうして凌駕してゆく。或はまた事の成る事おそきを嘆じもする。されど神の意はつひになる。その神意をなすにあたり思ひ邪しまなくして、御杖代となるも、また人としてふさはしからぬつとめではあるまい。我々は此の後とも幾多の説明に接するであらう。されど我らの達せ

んとするは、説明にあらずして生命である。我らは説明だけで人生を退れるものでない。我らは、我らの中に倭姫を生かし、マリヤを生かし、幼きイエスを我らの心に生ふしたてねばならぬ。我らは心の冬の眠よりたちて、光の春を呼びさまさう。

「地に跡を印した人々」以後の文、三十餘篇をあつめて一巻とい
たしました。これは「婦人の友」、「開拓者」、「神學評論」、「山
岳」、「サンデー毎日」、「日本及日本人」、「實業の日本」、「新小
説」、「教界時報」、「基督教世界」、「雲の柱」、「太陽」、「生命」
などの諸雜誌に、載つたものであります。省くべきを省きかね
たのもあります。

——同じ著者——

文集

武藏野の一角に立ちて
蜜の流るゝ地を求めて
地に跡を印した人々

研究

聖書動物考

紀行

聖書植物考

歌集

霧の王國へ
ひとりの歌

——同じ書肆——

大正十三年三月二十日印刷
大正十三年三月二十三日發行

著者 別所梅之



發行者 福永文之助
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

印刷者 須磨勘兵衛
京都市下京區北小路新町西入

發行所 警醒社書店
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

(總店東京 五五三番)
(電話銀座一五六七番)
(電話銀座一六九九番)

— 著者權所有 —
定價金貳圓五拾錢

525

144

終

